高位貴族の住まいか？！平城京の大規模邸宅

平城京跡（左京二条三坊一・八坪）　法華寺町

兵庫県芦屋市の六麓荘といえば、大きな家が建ち並ぶ高級住宅街を思い浮かべます。そこには、社会的地位の高い方が住んでいるようです。

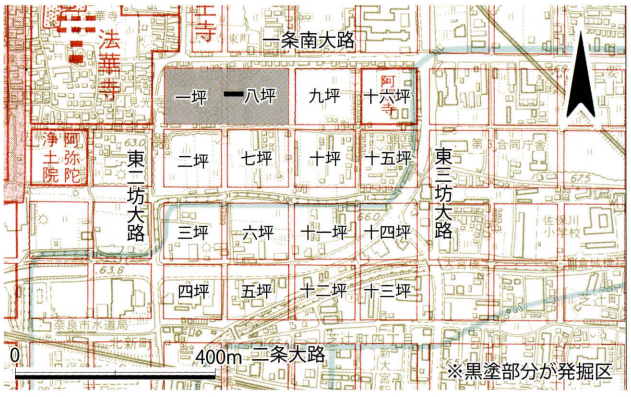
地位の高さと家の大きさが比例するのは、今に限ったことではなく、平城京でも同じことが言えるようです。ここでは、奈良時代に高い地位であったと思われる人物の住まいを、発掘調査によって確認した事例を紹介します。

なぜ大規模邸宅とわかるのか　平成 28 年、宅地造成に伴い平城京左京二条三坊一・八坪の発掘調査を行いました。発掘区は東西ふたつの坪にまたがるように設定したので、その間には南北の坪境小路が推定されます。今回の調査では、この道路東側溝が推定される位置で南北溝を検出しましたが、溝に重複する柱穴も見つかりました。つまり、坪境小路が施工されず、より広い宅地として構造物が建てられた時期があったということになります。この場合、少なくとも東西２坪をひとつの宅地とする２町以上で利用したことがわかるのです。２町以上での宅地利用例は、京内で数例しか確認されておらず、この規模だと高位貴族の邸宅、または公的施設である可能性が考えられます。

宅地は、遺構の重複関係や出土遺物から、奈良時代前半～中頃に２町以上、奈良時代中頃～後半に２町以下（一・八坪坪境小路を施工）、奈良時代末に２町以上で利用したことがわかりました。

大規模邸宅の建物　建物も宅地の規模に劣らず立派なものでした。小さな発掘区のため、建物の全貌を確認できたものはありませんが、通常一辺

大規模建物の柱



調査位置図（1/15,000）

60cm ほどの柱穴掘方が、なんと最大一辺 1.5mもありました。残存した柱は直径約 30cm と太く、なかには八角形に面取りされているものもありました。柱のいくつかには、大きな建物を支えるために必要な木材を組み合わせた礎板が見つかり、入念に柱を建てたことがわかりました。柱間は最大のものでは約３mと広く、それだけ柱が頑丈で大きな建物であったことが想像できます。

発掘区全景（南西から）

東院との関連を示す瓦

小さな発掘区でしたが、軒丸瓦が９種 14 点、軒平瓦が６種８点出土しました。これらの軒瓦のうち、注目すべきことは、平城宮東院所用軒瓦とされるうちの一組が出土していることです。

軒丸瓦は 6151Ａ（平城京の軒瓦は種類が多く、４桁の数字とアルファベットを組み合わせた型式番号を設定し、分類しています）と呼ばれる瓦で、匙状に弁中央が窪んだ細い８つの蓮弁の間から、幅広い間弁がのぞく蓮華紋を飾ります。調査地では５点と最も多く出土している軒丸瓦です。

軒平瓦は 6760Ａで、唐草が左右両端から中心に向かって４回反転し、中心に３弁の花紋を飾ります。こちらは１点しか出土していませんが、同様の紋様をもつ 6760 新種も１点出土しました。

平城宮東院の調査では、釉薬をかけて緑色に仕上げた施釉の 6151Ａ－6760Ａがみつかっており、これは『続日本紀』神護景雲元年（767）４月14日の記事にみえる東院玉殿に葺かれた「瑠璃之瓦」の可能性が指摘されています。

これら 6151Ａと 6760Ａは東院地区で比較的多く確認されますが、京内からの出土例はわずかです。京内ではほとんど出土しない、宮所用というべき東院の軒瓦が、特に軒丸瓦は５点も出土したことは、調査地の遺構の性格を考えるうえで、貴重な資料です。

帯金具（巡方）

奈良時代には、ベルトが位階を示すアクセサリーだったことが知られています。帯に金具（丸鞆・巡方）をいくつか取り付けるのですが、その材質や大きさで階級を区別していたようです。今回出土したのは、銅製漆塗りの巡方で大きさは 2.0cm ×2.4cm です。平城京での出土は、宮内に多く、京では二条大路以北に集中し、大規模邸宅の分布と一致します。

出土した巡方（実大）

出土した軒瓦